

伝統的祭礼に対する市民意識とソーシャル・キャピタル —— 徳島市阿波おどりの事例研究

渡 邊 隼

研究要旨

本稿では、徳島市阿波おどりと地域社会の関わりを主題として実施した市民調査から、阿波おどりに対する市民意識とソーシャル・キャピタルの関連を検討した。とくに市民調査の自由記述欄の回答内容を対象として、阿波おどりに対する市民の評価を中心に分析をおこなった。具体的には、自由記述回答にみられる阿波おどりへの評価をポジティブ／ネガティブという基準でコーディングし、回答内容の特徴をモデル化した。分析の結果から、阿波おどりに対するポジティブ／ネガティブな評価は量的には同程度であったこと、市民が阿波おどりをポジティブ／ネガティブに評価する理由がいずれも複数あったこと、「阿波おどりを過去はポジティブに評価していたが、現在はネガティブに評価している」という趣旨の回答がみられたこと、阿波おどりとソーシャル・キャピタルの関連を示唆する回答は少数であったことを明らかにした。

1. はじめに

本稿では、徳島市阿波おどり（以下「阿波おどり」）と地域社会の関わりを主題として徳島市民を対象に実施した調査の自由記述欄の回答に着目し、分析することを通じて、徳島市民の阿波おどりに対する評価の内実を明らかにすることを目的とする。具体的には、徳島市民を対象に実施した「阿波おどりと地域社会との関わり」に関するアンケート調査報告¹（鷲見・川瀬・渡邊 2024a）で回答項目として設定した自由記述欄の回答を分析する。

多くの伝統的祭礼と同様に、経済成長と人口増加が続いた時代の阿波おどりは、地域社会の経済活動を下支えするとともに、観光資源として多大な経済効果をもたらした。しかしながら、少子高齢化と経済の低迷、娯楽の多様化にともなう観光客の減少などを背景に、近年では阿波おどりの担い手が不足するという事態に直面している。2020 年から始まった新型コロナウイルスの感染拡大による開催中止は、阿波おどりという伝統的祭礼の持続可能性をはからずも問いなおすものとなった。さらにポスト・コロナ／アフター・コロナの時代を迎えたとしても、人口減少は続き、縮小社会化にともなう伝統的祭礼の担い手の減少や祭礼の規模縮小は回避できないことが見込まれる。伝統的祭礼の持続可能性を考えることは、地域社会の持続可能性を考えることに通底している。

こうした状況を背景に、本稿では阿波おどりに対する市民調査の結果、とくに自由記述の回答内容に着目し、阿波おどりに対する市民の評価の分析を通じて、伝統的祭礼に対する市

民意識と地域社会のソーシャル・キャピタルの関連を検討する。本稿は以下の順を追って進める。第2節では、阿波おどりの市民調査の概要と市民調査の自由記述回答の分析方法について説明する。第3節では、市民調査の分析結果を提示する。第4節では、本稿の分析結果から明らかになった知見をまとめ、今後の課題と展望を述べる。

2. 調査の概要

2.1 市民調査と連員調査の概要

まず、阿波おどりと徳島市民や阿波おどりの踊り手（連員）がどのように関わっており、いかなる影響をあたえているのかを明らかにすることを目的として実施した調査の概要を説明していく。ここでとりあげるのは、2022年から2023年にかけて2回実施した阿波おどりを対象とした徳島市民、ならびに連員へのアンケート調査の概要である。以下では、1回目の調査を「市民調査」、2回目の調査を「連員調査」とする。

1回目の市民調査（2022年11月21日～同年12月22日）では、15歳から74歳までの徳島市民を対象として、市民の徳島阿波おどりとのかかわりから、人びとのつながり、市民の日常生活、社会関係資本との関連を調べるために、調査票を郵送し、調査を実施した（鷲見・川瀬・渡邊 2024a）。5,000票の調査票を配布し、回収数（回収率）は1,100票（22.0%）であった。1回目の調査から判明したことは主に以下の三点である。第1に、2022年時点での市民による踊り手・連への協力、祭礼運営のサポートでかかわりがあった市民は5%程度であったが、過去のかかわりや観覧を含めれば、市民の80%程度が阿波おどりと何らかのかかわりを持った経験を有すること、第2に、地域社会や町内の活動、ボランティア活動などの自発的な社会参加・活動を通じて阿波おどりとのかかわりを持つ市民は過去も現在も多くなかったこと、第3に、市民の家族とのつながり、学校・職場の人とのつながりは強いが、近所との付き合いは密ではないこと、これらのソーシャル・キャピタル、QOLはコロナ禍で顕著に低下したことが明らかとなった。

2回目の連員調査（2023年6月中旬～同年7月末）では、1回目の調査票の一部に加筆修正を施したうえで、徳島市民のうち、徳島阿波おどりの「連」に属する連員を対象としてアンケート調査を実施した（鷲見・川瀬・渡邊 2024b）。2回目の調査から判明した連の活動に関する調査結果は主に以下の三点にまとめられる。第1に、連の活動に高頻度で参加した連員の割合は、コロナ禍前は80%超であったが、コロナ禍（2022年）では60%超に低下したものの、2023年にコロナ禍前の水準に回復した。第2に、コロナ禍では90%弱の連員が「練習・おどりの機会が減少」と回答し、そのうち活動量が半分以上減少したという回答の割合は60%超であった。第3に、連の活動に参加した連員の社会関係資本のうち、付き合い・交流、社会参加の指標はコロナ禍の2022年に低下したものの、2023年には回復傾向にあること、信頼の指標についてはコロナ禍の前後でほとんど変化がなかったことがわかった。

図表 1 市民調査の自由記述欄の回答状況

回答の有無	票数	割合 (%)
回答あり	416	37.8
回答あり（「特になし」相当の回答）	17	1.5
無回答	667	60.6

2.2 市民調査の自由記述欄の概要

本稿の主たる分析対象は、前述した2つの調査のうち、市民調査の自由記述欄（調査票の問35）の回答内容である。市民調査の自由記述欄の回答状況をまとめたのが図表1である。回収数1,100票のうち、自由記述欄の「回答あり」が416票（37.8%）、「無回答」が667票（60.6%）であった。「回答あり」の場合でも、「特になし」「別になし」のように実質的には「無回答」に相当する回答は17票（1.5%）であった。全体の40%弱が「回答あり」であったのに対し、約60%が「無回答」という結果となった。本稿では、自由記述欄の回答のうち、「回答あり」の調査票の回答内容に着目し、分析を進める。

2.3 分析方法

前節で確認した市民調査の自由記述欄（回答あり）を対象に、回答内容を精査し、分析をおこなう。具体的には、阿波おどりに対する市民意識について、ポジティブ（肯定的・積極的・好意的）な評価とネガティブ（否定的・消極的・非好意的）な評価という基準からコーディングし、分析をおこなう。

3. 市民調査の自由記述欄の分析

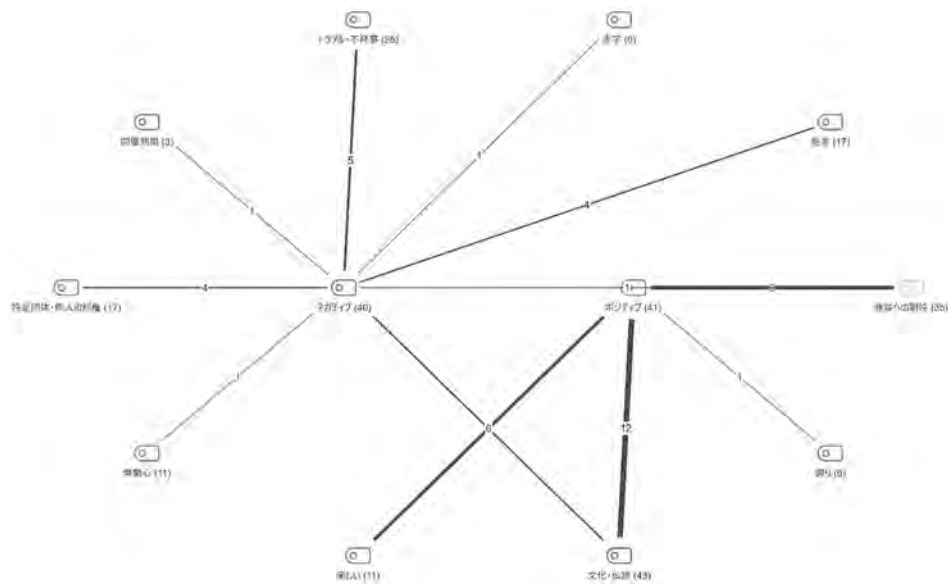
3.1 分析結果

阿波おどりに対して、ポジティブ（肯定的・積極的・好意的）な評価とネガティブ（否定的・消極的・非好意的）な評価を基準としてコーディングした分析結果を提示する。ポジティブな評価とネガティブな評価のコード共起モデルをまとめたのが図表2である。

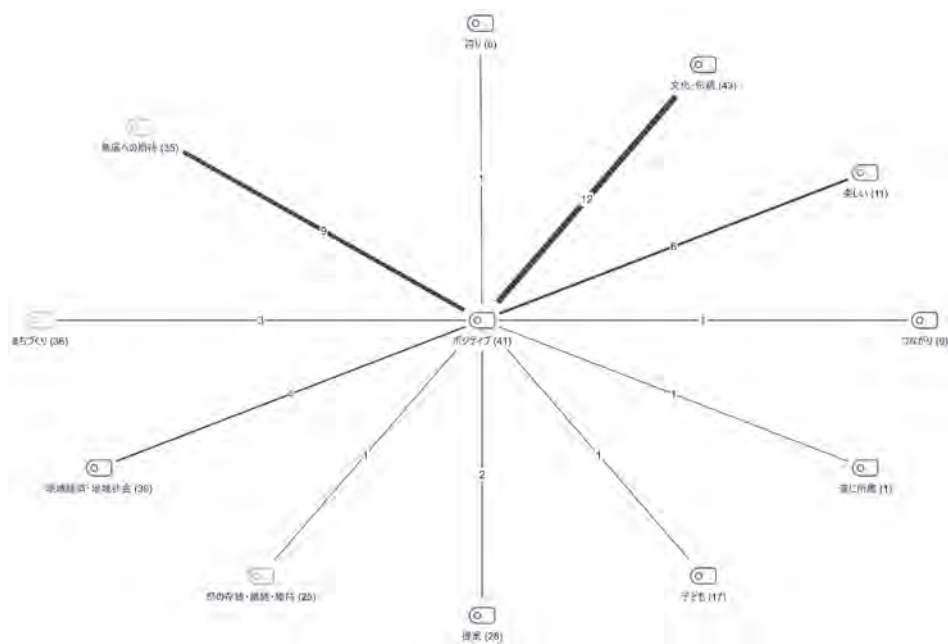
図表2のうち、阿波おどりに対するポジティブな評価のコード生起モデルのみを抽出したのが図表3である。市民調査の回答で「ポジティブな評価」として共起するコードでは、阿波おどりの「文化・伝統」、阿波おどり「発展への期待」「祭の存続・継続・維持」、ならびに阿波おどりと「地域経済・地域社会」や「まちづくり」との関連が多くみられた。そのほかには「楽しい（楽しみにしている）」といった趣旨の回答や阿波おどりは徳島の「誇り」とする回答、「子ども」の阿波おどりへの参加を肯定的にとらえる回答も少なくなかった。

他方で、図表4は阿波おどりに対するネガティブな評価を提示したものである。ネガティブな評価のコードとして多くみられたのは、近年の阿波おどりの運営をめぐる「トラブル・不祥事」や「特定団体・個人の利権」を批判する回答である。同様に「赤字」や「税金」と

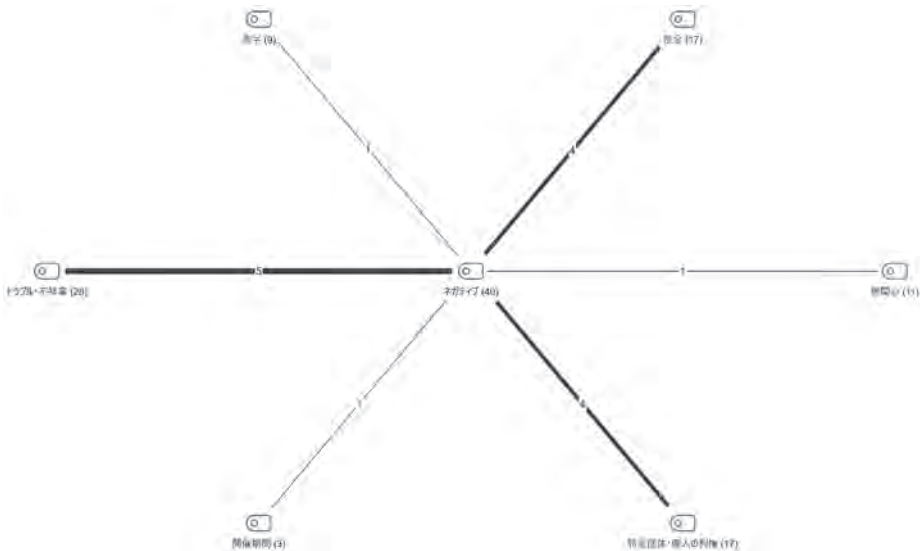
図表 2 ポジティブな評価／ネガティブな評価のコード共起モデル



図表 3 ポジティブな評価のコード共起モデル



図表 4 ネガティブな評価のコード共起モデル



いったコードも、阿波おどりを開催するための費用や経済的側面に対する市民の消極的な意識のあらわれといえる。ネガティブな評価としては、「開催期間」に関するものが少数みられた。これらはいずれも「開催期間が長い（2～3 日程度の開催が望ましい）」という趣旨の回答であった。その反対に「開催期間が短い」との回答はみられなかった。そのほかに、阿波おどりに「関心がない」「興味がない」「無関心」という趣旨の回答がいくらか確認された。

3.2 ポジティブな評価からネガティブな評価への移行

これまでに阿波おどりに対する市民意識として、ポジティブな評価／ネガティブな評価という基準から検討してきた。ポジティブな評価／ネガティブな評価のいずれかの立場を表明する回答が多いなかで、阿波おどりに対する評価の変遷を表明する回答が少ないながらも確認された。具体的には、「過去は阿波おどりをポジティブに評価していたが、現在はネガティブに評価している」という趣旨の回答である（13 票）。それらの回答には、「過去の阿波おどりは市民中心であったのに、現在はそうでなくなった」という見解が共通している。たとえば以下の回答は、そうした見解を顕著に示している。

一年中阿波おどりをしている今、お盆の盛り上がりが少なくなるのは当たり前だと思います。昔は年に一回だから楽しみにしていたのです。小・中学生の頃、運動会では必ず阿波おどりの練習があり、皆で踊っていたので、ある程度の年齢の方は誰でも上手、下手は別として踊れます。この事が今となれば、徳島に住んでいる誇りなのかもしれません。老若男女みんなが楽しめる阿波おどりであってほしいと思います。今はビジネス的

でエネルギーギッシュなのはわかりますが、本来の意味ももう一度考えてほしいと思いました。

上の回答は、前出のネガティブな評価、とくに「特定団体・個人の利権」や「開催期間」のコードとも関連している。そのほかにも、「庶民の祭りという原点に立ち返り、楽しい時間にしてほしい」、「参加型の阿波踊りに戻して欲しい」、「(…) 昔のように、市民中心の祭りであった頃（原点）に戻って、再考される事を願うばかりです」といった回答がみられた。

3.3 阿波おどりとソーシャル・キャピタルの関連

これまでみてきた阿波おどりに対する市民意識、とりわけ市民のポジティブ／ネガティブな評価をふまえて、阿波おどりとソーシャル・キャピタルの関連を示唆する回答を仔細に検討していきたい。ただし自由記述欄の回答では、ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）という用語を使用した回答はみられなかったため、ここではソーシャル・キャピタルを示す「つながり」「きずな（絆）」といった言葉の使用に着目し、回答内容を精査する。もっとも、「つながり」「きずな（絆）」について言及した自由記述欄の回答は多くなかった。具体的には、「つながり」を使用した回答が9票であり、「きずな（絆）」は0票であった。さらにソーシャル・キャピタルを示す言葉を使用していたとしても、阿波おどりと関連づけて言及しているわけではないことに注意をはらう必要がある。具体的には、「つながり」を使用した回答9票のうち、阿波おどりと「つながり」を関連づけた回答は以下の2票であった。ひとつは、「（阿波おどりは）地域、人とのつながりを維持する上、非常に大切なものと考えている」（原文ママ、丸括弧内は引用者注）という阿波おどりに対するポジティブな評価の回答である。いまひとつは、もはや阿波おどりは地域社会の「つながり」とは関係がないとする以下の回答である。

阿波おどりが、地域社会のものでなくなっている感じがする。観光資源が他県、他地域に比べて乏しいためか、一部の人間が躍起になって阿波おどりをショー化し、地域社会の「文化」としてはかけ離れたものになっている。徳島市はいまだ、市周辺部では田畑が広がり、住所に「字」がつく農村集落の形を残す地域が多くある。阿波おどりという非日常の「イベント」が、そのような地域社会のつながりと何ら関係ないように思う。

上の回答は、阿波おどりを「地域社会のつながり」という観点から批判的にとらえている。先述したように、阿波おどりに対するネガティブな評価のコードとして多かったのは、「トラブル・不祥事」や「特定団体・個人の利権」といったものであった。そのなかで阿波おどりと「地域社会のつながり」とは関係がなくなっていると批判した上の回答は、ネガティブな評価としては例外的なものである。さらに回答文中にみられる阿波おどりの「ショー（化）」

という言葉は、ほかのネガティブな評価の回答でも複数みられたことを付記しておきたい。

阿波おどりと「つながり」を関連づけた上記2票のほか、社会一般の傾向への言及（「つながり」の希薄化）、あるいは地域社会、町内会との関連で「つながり」に言及した回答が複数みられた。たとえば、以下のような回答である。

（…）私が住んでいる〇〇地区は、とても住みやすい、子育てしやすい環境です。町内会にも入っている所以地域との連携もあり、人と人とのつながり、助け合いもあり居心地がよいです。私は△△出身ですが、徳島が大好きです。（引用者注：回答文中の〇〇と△△にはそれぞれ地名が記載されているが、回答者のプライバシーを考慮し、伏字とした）

町内会などでも新しく新居を構えた人など若い世代の人などは町内会などには入らず地域等のつながりが薄くなった気がする。

（…）地域社会のつながりは希薄だが、生活する上で特に不自由はない。近所の人と会う機会も話す機会もないが、平穏なので特に興味ない。

上にみてきたように、阿波おどりと「つながり」を関連づけた自由記述欄の回答は必ずしも多くなかったが、地域社会や町内会との関連で「つながり」に言及した回答はいくつか確認された。

4. おわりに

本稿では、阿波おどりと地域社会の関わりを主題として実施した市民調査の自由記述回答のコーディングと分析から、阿波おどりに対する市民の意識と伝統的祭礼に対する評価という側面に着目して分析をおこなった。市民調査の分析を通じて明らかになったのは、主として以下の4点である。

第1に、調査票の自由記述欄の回答状況を整理し、阿波おどりへの市民のポジティブ／ネガティブの評価の量は同程度であることを明らかにした。

第2に、阿波おどりに対する市民意識のポジティブ／ネガティブな評価の理由を詳述した。まず、阿波おどりに対するポジティブな評価の理由として、阿波おどりの「文化・伝統」、「発展への期待」「祭の存続・継続・維持」を評価する市民が多いこと、それに次いで「地域経済・地域社会」や「まちづくり」との関連から阿波おどりを好意的に評価する回答が少なからずみられたことが確認された。いっぽうで阿波おどりに対するネガティブな評価として多かったのは、阿波おどりの運営にまつわる「トラブル・不祥事」や「特定団体・個人の利権」への批判的な回答であった。それらに関連する「赤字」や「税金」といった経済的・金銭的な

側面に対する消極的な回答のほか、「開催期間（が長い）」とする回答もみられた。

第3に、阿波おどりを「過去はポジティブに評価していたが、現在はネガティブに評価している」とする回答を詳細に検討した。全体からすれば量的に多いとはいえないものの、阿波おどりに対する評価の変遷を表明する回答が確認された。それらの回答に共通するのは、「昔の阿波おどりは市民（庶民）中心の参加型の祭礼であったが、現在はそうではなくなった（だから、昔の阿波おどりのような本来のありかたに戻ってほしい）」という見解であった。

第4に、阿波おどりとソーシャル・キャピタルの関連を検討した。まず、市民調査の自由記述欄では、ソーシャル・キャピタルを指し示す「つながり」などの言葉の使用が多くなかったこと、阿波おどりと「つながり」を関連づけた回答はとくに少なかったことを確認した。

以上の研究知見をふまえて、本稿に残された課題と今後の展望を述べていく。今後の課題は多岐にわたるが、ここでは3点のみあげておきたい。第1に、本稿では十分に検討できなかったコードの分析である。本稿では市民調査の自由記述欄の回答のうち、阿波おどりに対するポジティブな評価／ネガティブな評価という側面に焦点を絞ったことから、ほとんど言及できなかったコード、あるいは未使用のコードが数多く残されている。とくに「観光」や「まちづくり」に関する回答は比較的多くみられたものであったが、本稿では十分に検討できなかった。「観光」や「まちづくり」に関する回答には市民のすぐれた「提案」が少なからず含まれていたことをつげくわえておきたい。第2の課題は、連員調査の自由記述欄の分析に関することである。市民調査と同様に、連員調査でも自由記述欄を設け、回答を得ていたが、本稿では市民調査の自由記述回答のみを分析対象とした。将来的には連員調査の自由記述欄の分析を進めるとともに、本稿で得られた市民調査の分析結果と連員調査の分析結果との比較検討が今後の課題である。第3の検討課題は、質的調査・質的分析によるソーシャル・キャピタルの調査研究の方法論である。ソーシャル・キャピタルの質的調査・質的分析の方法論については、これまで Dudwick, Kuehnast, Jones & Woolcock (2006) をはじめとする先行研究が調査研究の方針を示してきた。現在ではインタビュー調査や参与観察法などの質的調査にもとづくソーシャル・キャピタルの調査研究がさまざまな研究領域で展開されている（井上・渡辺 2015; Torrejón & Martin-Matthews 2022）。本稿でおこなった市民調査の自由記述回答の質的分析からは、阿波おどりとソーシャル・キャピタルとの関連は必ずしも強くないことが示唆された。しかしながら、適切な研究手法を採用すれば、自由記述回答の分析はソーシャル・キャピタルの有効な調査研究方法になりうる。自由記述回答の質的分析は、インタビュー調査、参与観察法などの質的調査・質的分析、あるいは量的調査・量的分析と組み合わせることによって、ソーシャル・キャピタルの調査研究に相乗効果をもたらすことが見込まれる。今後の検討課題として調査研究を継続し、別稿を期したい。

参考文献

- Dudwick, Nora, Keuhnast, Kathleen, Jones, Veronica Nyhan & Woolcock, Michael (2006) “Analyzing Social Capital in Context: A Guide to Using Qualitative Methods and Data.” World Bank Institute Working Paper.
- 井上智代・渡辺修一郎 (2015) 「農村における健康に資するソーシャル・キャピタルの質的分析——高齢者へのグループ・インタビューを通じて」『日本農村医学会雑誌』 63(5), 723-733.
- 鷺見英司・川瀬晃弘・渡邊隼 (2024a) 「「阿波おどりと地域社会との関わり」に関するアンケート調査報告」『経済集志』 93(3), 29-52.
- 鷺見英司・川瀬晃弘・渡邊隼 (2024b) 「徳島阿波おどりの連員を対象とした「阿波おどりと地域社会との関わり」に関するアンケート調査報告」『経済集志』 93(3), 53-74.
- Torrejón, María-José & Martin-Matthews, Anne, 2022. “A qualitative approach to bridging and bonding social capital: Experiences of a cohort of Chilean older people,” *Social Science & Medicine*, 296(C).

